

日本精線

新中計を聞く

ステンレス鋼線のトップメーカー、日本精線は、2024年4月から3力年の新中期経営計画をスタートさせた。サステナビリティ・成長分野の高機能・独自製品の開発を深化し、生産基盤の強化を進める。利光一浩社長に新中計の骨子や今後の展望について聞いた。

——前中計の振り返りから。
「前中計の振り返り」 億円という目標を3年間で達成し、売上高は23年3月期、連結経常利益は22年3

「連結売上高420億円、連結経常利益42億円、連結経常利益は22年3



利光 一浩社長

月期にそれぞれ過去最高を記録した。設備投資は完工ベースで約57億円を投じ、枚方工場（大阪府枚方市）の極細線能力増強や金属繊維製造部門のリフレックス投資、海外拠点のタイ精線ではね材機能増強などを実施した。前倒しの投資により、顧客のニーズにも対応できた。水素関連事業では21年に水素事業開発室を開設し、枚方工場で触媒ワイヤによるMCH（メチルシクロヘキサン）からの水素

回収小型プラントが完成した」

——新中計「NSG 26」の概要は。

『Nippon Steel Sustainable Growth』をスローガンに前中計と軸は変えず、サステナビリティ・成長分野への高機能

中期平均比で20%伸ばしたい。35年に向けた長期ビジョンでありたい姿を設定し、そこから26年までの3年間で何をすべきかバックキャストイングで考えた」

「熱処理炉・ボイラーの排熱利用などエネルギーロスの削減を徹底する。ガス炉から電気炉への転換も検討している。CO₂フリー電力の使用比率を上げるなど段階的に取り組み、30年に13年比で30%のCO₂排出量削減を目標としている」

——設備投資計画は。「3年合計で稟議ベース77億円を計画する。うち32億円は極細線の増産

8号の製造技術確立に向けて取り組んでいく」

「半導体製造装置などに用いられる超精密ガスフィルター『NASCI ean（ナスクリーン）』（商標登録済）や、金属繊維のフィルターなどについて今後も後の需要拡大が見込まれる。再生可能エネルギーや医療、AI、

高機能製品の拡販加速

・独自製品の開発・拡販を加速させる。最終年度にあたる27年3月期には連結売上高500億円、連結経常利益52億円、連結ROA、連結ROAともに10%以上、連結配当性向50%程度に引き上げなどを目指す。当社の高機能・独自製品はSDGsに貢献するものが多く、売上高成長率を前

投資で、今後さらなる増加が見込まれる太陽光発電パネル向けの需要を取り込む。超極細線の量産化設備投資や金属繊維スランド酸洗設備の更新、中国・耐素龍精密濾機（常熟）の真空炉3号機設置、タイ精線の生産管理システム更新などを予定している」

——カーボンニュートラルに向けた取り組みは。開発状況は。線径8号の極細線の開発も始めた。「太陽光発電パネルのスクリーン印刷用などに使われる極細線は線径11号に加え、昨年からは9号にも販売開始した。当社にしか製造できない高付加価値製品で、細線化するほど太陽光パネルの発電効率向上に大きく寄与する。最先端のニーズに対応するべく、今後は

自動車CASEといった高度化する各分野のニーズに対応するため、当社の高機能・独自製品を積極展開していきたい」

——アンモニアからの水素回収技術確立にも取り組む。「研究を進めてきた水素回収技術、貯蔵技術、分離精製技術を組み合わせた小型プラントで、MCHから触媒ワイヤを用いて高純度の水素を回収する実証実験を商用化に向けて進めている。さらにアンモニアからの水素回収も実現させるため今後、触媒ワイヤなどの開発を深化させていく」

（篠原 沙綾）

8号超極細線 製造技術確立へ

「現場の人員を確保するため、製造拠点を置く大阪以外の地域からも高卒の採用を進める。総合職のキャリア採用も積極的に行う方針だ。極細線の製造には若手の力が欠かせない。社内の教育制度を見直して社員全員にノウハウ、知識、技能が学べる機会を作っていく。昨年、女性活躍推進チームも立ち上げ、女性目線で働きやすい環境を作っていく。エンゲージメント調査も実施するなど会社と社員の結びつきを強め、自ら考えて変化でき、成長するためのアイデアが出せる人になってほしい」